

機関番号：14401
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20520084
 研究課題名（和文） 植民地中南米における「間文化的アイデンティティ」の美術
 研究課題名（英文） Representations of Intercultural Identity in Latin American Colonial Art
 研究代表者
 岡田 裕成 (OKADA HIROSHIGE)
 大阪大学・文学研究科・准教授
 研究者番号：00243741

研究成果の概要（和文）：

本研究は、イスキルパン修道院聖堂壁画の作例を象徴的な事例とする、ヌエバ・エスパーニャ副王領の布教区聖堂装飾美術における「先住民的」なモチーフ群が、スペイン人統治者・宣教師の「エキゾティシズム」的な関心と、その「エキゾティシズム」をも利用しつつ自らの新たなアイデンティティを構築した先住民首長層の、相互的な関与のもとで生まれた「間文化的」な表象群であることを、植民地で制作された挿絵手稿本や、同時代のヨーロッパにおける新世界に関わる図像イメージの分析をとおして解明した。

研究成果の概要（英文）：

This research program has traced the historical process of the intercultural negotiations in the Viceroyalty of Nueva España that produced a series of iconographical motifs of the “indigenous” nature and culture that appeared in the decoration of the sixteenth-century mission churches such as the well-known murals in the Convent of Ixmiquilpan. The comparative study between the visual documents such as “codices” made in the colonies and the American imagery invented in Europe after the Age of Discovery shows that those “indigenous” images were formed under the intervention of both European colonizers absorbed in the “exotic” interest toward the newly found territories, and the indigenous elite who reconstructed their cultural identity understanding even such an exoticism of the new rulers.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目： 哲学 美学・美術史

キーワード： ラテンアメリカ メキシコ アンデス 植民地美術 キリスト教美術

1. 研究開始当初の背景

申請者は平成 12 年度より、本年度にいたるまで、3 期にわたって科学研究費補助金の助成を受け、おもに南米アンデス地域において、

植民地時代の美術に関する調査研究をおこなってきた。12 年度から 14 年度においては、従来研究者の立ち入りが困難であった多くの郡部遠隔地を含む 116 カ所 158 の聖堂、修道院を実地に調査し、約 1 万 5 千カットの資

料写真を撮影して、研究の基礎を固めた。

ついで、16年度からは、追加的な実地調査を重ねつつ、収集資料に基づき、聖堂装飾の図像モチーフについて、ヨーロッパから移植された支配文化への先住民社会の応答という観点から体系的な研究を行った。その成果は、ニューヨーク大学美術史研究所、パリ社会科学高等研究院、ボリビア歴史アカデミーで開催した研究ワークショップなどで報告するとともに、本年2月に刊行した著書『南米キリスト教美術とコロニアリズム』（研究分担者・齋藤晃との共著、名古屋大学出版会刊）において発表した。そこで提示した重要な眼目のひとつは、植民地時代に再編された先住民社会のエリート層が、支配者の側のエキゾティシズムの幻想さえ熟知した上で、その一方的な他者表象をみずからなぞり、流用する、極めて屈折した美術を創り出していたことであった。

本研究計画は、こうした美術のありようを、植民地支配という困難な状況に直面した先住民エリート、「間文化的アイデンティティ」とでもいうべきものの産物と位置づけ、そのうえで、アンデス地域にも先行して、16世紀の早い時期から、ヨーロッパ文化と先住民社会が濃密な交渉をおこなった、メキシコ（ヌエバ・エスパーニャ副王領）初期ミッションの美術を研究しようとするものである。

メキシコの被支配民となったナワ人らを中心とする先住民は、征服以前から、高度な社会システムを構築するとともに、絵文書などの豊かな視覚表象文化を発達させていた。スペイン人とキリスト教会は、その文化を巧みに取り込むとともに、征服された先住民の側も、エリート層を中心に、すばやく支配文化を吸収し、みずから行使するようになった。宣教師による英才的な教育を受けた先住民エリートの子弟は、ヨーロッパ的教養に精通するとともに絵画芸術の手ほどきも受け、ミッション聖堂の壁画装飾や、絵文書的な挿絵本の制作に従事した。こうして成立したメキシコ初期植民地時代の美術は、アンデス地域に比べて時期的に先行するだけでなく、一時300カ所ほどにも及んだ各地のミッションにおいて、大いに隆盛することになった。

このミッション美術における先住民の関与については、近年、グリュジンスキやピーターソンらの研究によって、広く認識されるようになった（Serge Gruzinski. *The Mestizo Mind*, New York, 2002; Janette F. Peterson. *The Paradise Garden Murals of Malinalco*, Austin, 1993.）。しかしながら、「混血 mestizo」文化の形成を、16世紀メキシコの「ルネサンス」と称揚するグリュジンスキは、その「混血」の背後にあった、支配者と従属者の錯綜した関係性に、必ずしも十分な関心を向けてこなかった。たほう、聖堂装飾モチ

ーフの源泉について詳細な検討をおこなったピーターソンは、先スペイン期文化からの直接的な影響をやや重視しすぎているように思われる。これに対し申請者は、前述のアンデス植民地美術研究をとおして明らかにした、被支配民エリートの、屈折したヨーロッパ文化受容のモデルが、最初の文化間交渉の美術の形成期というべき、この重要な歴史局面の解明においても、極めて有効であると着想するにいたった。

基本的に西洋側の視点に立つ従来の多くの植民地文化論は、先の「混血」論を筆頭に、自己の文化と他者の文化が融合して、何らかの新しい文化が生まれる「創造」的な過程を強調しがちであった。しかし、植民地の困難な政治的状況に置かれた被征服者は、決して無垢な他者ではなく、支配者がみずからに投影する幻想や好奇のまなざしさえ知悉し、それを逆手に取ることもできる、高度に自覚的な主体であったと申請者は考える。そこに生まれる美術は、ヨーロッパ的な意味での、単純な「創造」の論理では捉えきれないものと見るべきである。こうした視点は、16世紀以来、ヨーロッパのヘゲモニーのもとでの文化交渉をとおして生まれた、世界各地の植民地ないし準植民地の美術を、非西洋の視点から問い直す契機となりうるものである。

2. 研究の目的

本研究の具体的な対象となるのは、メキシコ初期ミッションの聖堂を飾った、壁画を中心とする装飾美術である。

16世紀末までにおよそ300カ所に及んだミッションでは、宣教師の教育を受けた、多くは先住民エリート層出身の絵師たちが、新大陸固有の風物や、先住民戦士の戦闘場面など、明らかに非ヨーロッパ的なモチーフを用いた絵画装飾をおこなっている。その代表的な例である、イスミキルパンの修道院聖堂の身廊壁画や、マリナルコの修道院回廊壁画などについては、先述のグリュジンスキやピーターソンらによって研究がなされている。しかしながら、これらの研究では、それぞれの壁画装飾のユニークさを強調するあまり、征服以来、ミッションの周辺で制作された挿絵手稿本などの類縁性や、その類縁性の背後に見いだすべき意義が、十分に検討されてこなかった。

植民地時代の挿絵手稿本は、征服以前のアステカなどの絵文書の伝統を出発点として、宣教師らの関与のもと、新たな図像体系や絵画表現を確立した。またこれらは、しばしば本国の国王に献呈されたことから、制作の目的や、期待された役割においても、注目すべき「間文化的」性格をもつ。申請者はそれゆえ、まず研究の第一段階として、1) 支配者側のまなざしを意識した先住民芸術家

が、主として挿絵手稿本において、どのようなモチーフや視覚形式の選択をおこなったのかを系統的に検証し、さらに、2) この挿絵手稿本と聖堂壁画との、造形表現と図像の両面に渡る関係性を明らかにする。またあわせて、3) 宣教師のもとでの先住民芸術家の教育システムや、4) 挿絵手稿本および聖堂壁画における、発注者（企画者）や想定された観者といった、作品制作の前提となる枠組みについても、総合的な解明を試みる。

3. 研究の方法

上記の課題に取り組むため、本研究は主として次のような方法で進めた。

(1) 挿絵手稿本の画像資料の系統的収集と分析：ヌエバ・エスパーニャおよびアンデスで制作された挿絵手稿本の画像資料を系統的に収集するとともに、先住民風俗モチーフに関して、とりわけ重要と思われる『フィレンツェ絵文書』、『メンドーサ絵文書』など10点については、総計約1800点の挿絵について、その図像モチーフの詳細な分類整理と比較検討。

(2) ウッフイツィ宮殿旧武具の間の Fresco 天井画実地調査：新世界の風俗・自然モチーフがヨーロッパ側のどのような関心のもとに受容されたのかを解明するため、ヌエバ・エスパーニャ渡来の挿絵手稿本を参照して描かれたと見られるウッフイツィ宮殿旧武具の間の Fresco 天井画の実地調査。

(3) 周辺関連図像の収集：上記の収集図像が同時代においてももちえた意味を明らかにするため、宗教的・世俗的祝祭の装飾・催事や、羽根モザイク聖画など先住民が制作に深く関わった作品など、周辺の領域に関する図像・記述資料の収集検討。

(4) 関連史資料の収集検討：植民地における美術制作に関する記述を含む、フランシスコ会やアウグスティノ会の宣教記録など関連史資料の収集検討。

4. 研究成果

(1) ヌエバ・エスパーニャの挿絵手稿本におけるモチーフ選択とその視覚形式：これについて、系統的な分析を進めた結果、一連の16世紀挿絵手稿本において、先住民戦士の表現と、その戦闘図にいくつかの図像上の系譜が存在することを確認した。戦士像においては、コーン型の被り物をはじめとする特徴的な扮装が、征服以前の意匠・風俗に忠実なかたちで再現描写され、『メンドーサ絵文書』、『フィレンツェ絵文書』などに繰り返し用いられる。こうした類型は、さらに、挿絵手稿本の移動にとともに、ヨーロッパの装飾美術における新大陸表象の中にも流入し、大西洋の両岸において共有された。

また、戦闘図においては、儀礼的なものを

含む先住民間の戦闘、侵入したスペイン人との戦闘の他、歴史的には存在しない、モロ人と新大陸先住民の戦闘の図像が存在すること、そしてそれが、征服後のヌエバ・エスパーニャの祝祭における模擬戦と深いつながりをもつことを確認した。こうした図像は、植民地時代をとおして盛んに行われた、副王入市式の凱旋門などの装飾にも引き継がれる。

また、挿絵手稿本においては、各頁や挿絵の縁取りに、ヨーロッパの書物を模した、グロテスク文様による装飾がしばしばなされている。本研究においては、こうした装飾が、植民地においては、描かれる視覚的なイメージの、ある種の「権威づけ」の手段として機能していた可能性を跡づけた。

(2) 挿絵手稿本と聖堂壁画との造形表現と図像の両面に渡る関係性：これについては、とりわけイスマキルパンの旧サン・ミゲル布教区修道院聖堂の装飾壁画が重要な意味をもっている。本研究においては、この聖堂壁画の戦士像が、『メンドーサ絵文書』や『フィレンツェ絵文書』などと図像上密接な関係をもつことを明らかにした。

また、このイスマキルパンの聖堂壁画と類似したモチーフを描く、ウッフイツィ宮殿（フィレンツェ）旧武具の間 Fresco 天井画の実地調査に基づき、こうした図像イメージが、同時代のヨーロッパにおいて、エキゾティシズムの表象として理解されていたことも詳しく明らかにした。

さらに、こうした聖堂壁画に見られる、「エキゾティック」な先住民的モチーフとグロテスク文様との組み合わせは、上述の挿絵手稿本の形式と並行的な関係にある。こうした図像文化の祖型として、グロテスク文様の流入と、先住民的で「エキゾティック」なモチーフとの組み合わせを促したのは、先住民首長層が、征服直後から盛んに作成した、ヨーロッパ風の紋章図像であるとみられる。

このような図像文化の連関から、エキゾティシズムのまなざしを新大陸アメリカに向けたヨーロッパ側と、それを知悉しつつ自己の図像文化を構築していった、植民地時代先住民首長層の文化間交渉のありようが具体的に明らかになった。

(3) 先住民芸術家の教育システムや、挿絵手稿本および聖堂壁画における、発注者（企画者）や想定された観者：これについては、フランシスコ会の宣教師ヘロニモ・デ・メンディエタの著作 *Historia eclesiastica indiana* など同時代文献などの検討をとおし、先住民学校の制度を検討したほか、挿絵手稿本や聖堂壁画それぞれの制作経緯に基づき、植民地における図像文化の生産・流通・受容のサイクルを明らかにした。ここで注目したのは、当初、征服者や宣教師たちに

より、「他者」として一括りに対象化された先住民たちのなかから、首長たちを中心とするエリート層が、しだいに図像文化の担い手となってゆく過程である。彼らは、一般の先住民に対してはスペイン人統治者・宣教師の代理人として振る舞う一方、統治者・宣教師に対しては先住民の代表として自らを提示した。そうした中で彼らは、一般先住民たちに、類型的な宣教のイメージを提示する「良きキリスト教徒」としての役割を分担すると同時に、征服以前の歴史に根ざす「民族的」なアイデンティティを誇示する、独自のポジションで、図像の生産・流通・受容の各局面において主体的に関与したのである。

以上のような個別の問題軸に沿った検討をもとに、本研究は、イスミキルパンの作例を象徴的な事例とする、ヌエバ・エスパーニャ副王領の布教区修道院聖堂の装飾壁画における「先住民的」なモチーフ群が、スペイン人統治者・宣教師の「エキゾティシズム」的な関心と、その「エキゾティシズム」をも利用しつつ自らの新たなアイデンティティを構築した先住民首長層の、相互的な関与のもとで生まれた「間文化的」な表象群であることを明らかにした。

このような「間文化的」表象群は、アンデスの先住民首長層が、自身とその祖先の肖像画に確立した独自の類型などに、並行した事例を認めることができる。本研究は、植民地の先住民エリートの生みだした図像文化の背後に共通して指摘しうる、その生成の論理を明らかにするものでもある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 岡田裕成, “Golden Compasses” on the Shores of Lake Titicaca: The Appropriation of European Visual Culture and the Patronage of Art by an Indigenous Cacique in the Colonial Andes, 大阪大学文学研究科紀要, 査読無, 51, 2011, pp87-111.

② 岡田裕成, 新大陸植民地における美術の移植 ヌエバ・エスパーニャ 16世紀布教区修道院の装飾壁画をめぐって, 西洋美術研究, 査読有, 14号, 2008, pp54-81.

[学会発表] (計2件)

① 岡田裕成, エキゾティック/グロテスク: 新大陸植民地に移植された地中海古代の記憶, スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会15周年記念公開シンポジウム, 2011年11月22日, 東京, セルバンテス文化センター

② 岡田裕成, “Golden Compasses” on the Shores of Lake Titicaca: The Appropriation of European Visual Culture and the Patronage of Art by an Indigenous Cacique in the Colonial Andes, Hispanic Institute 連続公演, 2011年4月19日, Hispanic Institute, Columbia University, New York.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 裕成 (OKADA HIROSHIGE)
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号: 00243741

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし